

人間にとって食料とは何か、 農業とは何か

京都大学大学院農学研究科教授

末原達郎

Tatsuro Suehara



テンボの人たちが
主食とするキャッサバのイモ

農業が 目に見えなくなつた時代

日本では、農業者数、農業生産量などが、ここ数年、徐々に減少し続けている。それにもかかわらず、実は今、農業が見直され始めている。その大きな要因のひとつは、やはり食の問題にある。消費者の側からの食に対する不安と不信感が大きく高まっているからだだろう。農産物がどこでどう作られて、どのような流通経路を通り、自分たちの口に入っていくのかが、今は見えなくなっているからである。

私が子どもの頃、京都の市内でも、上賀茂の方から大八車にのせて、週に2〜3回は採れたての野菜を振り売りに来ていた。また学生時代でも、北白川のあたりには、まだ畑が多くあり、農作業する姿もよく見かけた。農業は身近なものだったのである。

ところが、現代では都市住民にとってだけでなく、農村でも農業が見えにくくなっている。昔は、野菜も米や麦も多種類のものを一軒の農家で作っ

ていた。ところが、米の生産に特化してしまつた農家は、現在では食品の大部分をスーパーや農協の販売店で買っている。日本の農業の歴史は、戦後大きく米の単作化へと進んできた。しかも、その米でさえ自由貿易化の波にさらされようとしている。

以前、丹後半島で農村調査をした時のこと、サバをぬかに漬けた「へしこ」を漁協で買い求めたら、なんとサバはノルウェー産。現在の市場経済の原理は、農産物も工業製品をつくるのと同じで、ものを加工するには、同じ大きさで適切な量のもので安定して入ってくる必要がある。その結果、丹後の海沿いの漁村でさえ、目の前の海で獲れるものよりもノルウェー産のものの方が安くて使いやすいものとなる。このように、日本の食生活は、都市であれ、農村であれ、漁村であれ、すでに都市文明化したものになり、生産と消費の関係が構造的に不可視になってしまつている。

食物と農業とをつなぐ線が見えにくくなつてきたのは、日本では1960年代であり、「農業基本法」ができた時代にあたる。戦後、日本が農業生産国から工業製品の輸出国に変わっていくために、

大きな制度的改革が求められた。政府は貿易と為替に関する自由化の大綱をつくり、工業製品を輸出する仕組みに変えていったが、それは同時に外国からの農産物を輸入することにつながった。結果として、日本は貿易輸出国となり、発展途上国から先進国へと移行していくことになる。

まず1960年に121品目の農作物の輸入が自由化された。64年には林産物の輸入自由化も行なわれた。現在、日本の森林の手入れが行き届かなくなったのは、この時以来の自由化で外国産の安い木材が輸入され、国内産の木材が用いられなくなったからである。さらに、80年代から90年代にかけて、発展途上国を含めて世界全体が市場経済化されていき、世界中のあらゆる農産物が日本に入ってくるようになった。2000年以降は、さらに大きな構造的変化が起こつてきている。

その一方で、目に見える農業を求める試みがいっつか見られる。日本の農業で、一番うまくいっているのは農産物の直売所だろう。これはフランスなどでも見られ始めている。都市の住民と農家との直売関係が目に見えるかたちになる。今は、誰がどういふ農産物を作り、どこに出しているの

か、生産者と消費者をうまくつなぐことが求められている時代になっている。食品の認証制度や表示制度なども、同様のことを求める制度化の試みである。途上国の農産物に対しては、フェアトレードの仕組みが模索されている。これは中間の多国籍農企業を通さずに、途上国の農家の人々と、先進国の都市の消費者を直接結びつけ、支援しようとするものである。

アフリカ研究から 農業の意味を問い直す

現在は、市場経済化によって見えにくくなってしまった農業の意味を、もう一度原点に戻って見つめなおすことが必要だろう。私が、アフリカ研究に携わった大きな理由は、人間と食料の関わり合いを、人類の誕生、狩猟採集活動の意味、牧畜の誕生、農業の成立と比較しながら問い直してみたいと思ったからである。

我々人類は、もともとは森林からサバンナへ出ていった特殊な霊長類である。森林とサバンナの境界付近で、新しい進化を遂げた。地球は何度も寒冷化と温暖化を繰り返しているが、寒冷化の時代には赤道付近は乾燥し、森林地帯は縮小する。このとき、サバンナの側に残されたサルたちは、森の中にいた時のようには、果実や植物、昆虫などを食べることができなくなった。おそらく、禾本科類の様々な植物、雑草などを食べ出した。あるいは、動物の遺体なども食べただろう。こうして人間は、「オムニボラス」（雑食性）を身につけた。英語で言う

と「ジェネラライズド・イーター」（何でも喰い）となる。サバンナという境界地域に残ったために、その食生活も広くならざるを得なかった。しかし、人間は、この特性を持ったが故に森林から離れることができた。この雑食性によって、やがて狩猟採集



山の斜面に広がるテンポの焼畑農業

をしながら、アフリカから世界各地へと広がっていくことが可能になったのである。

その変化の中心地と目されるのが、大きな湖や大きな山が連なる「グレート・リフト・バレー」（大地溝帯）である。人類の祖先の化石のほとんどは、

実は大地溝帯の周辺部から出ている。

私は、この近くの山岳地帯にあるテンボ人の村で、70年代の終わり頃から15年間にわたり、農耕に携わる人々の暮らしを定期的に調査してきた。これは、京都大学の自然人類学の伊谷純一郎先生と文化人類学の米山俊直先生による、人類の進化の合同調査で、狩猟採集民、農耕民の世界をそれぞれ比較研究するものであった。

アフリカのさまざまな人間の社会でも、農耕を行なう時には、人間が土地を耕し、人間が作物を育み、動物を育み、生活をつくりあげていく。人間は自然とのほざまで、自然の力を取り込みながら、作物や家畜を育て、農業を生み出してきた。農業により、自然の中に埋没していた状態から、人間は離陸することができたのだと言えるだろう。

調査の中心となったテンボ人の農耕は焼畑である。かつて、焼畑農業は生態環境にマイナスの影響を及ぼすと言われた時期があった。しかしそれは、南米などで、森林地帯を伐採して大牧場にすゑる途中での焼畑のことである。誤解されがちだが、実際の焼畑農業では、地力回復を考えて、必ず休閑期間を設ける。さらに長く放置された土地は二次林に変わっていく。このように、長い時間で考えると、長期間のローテーションシステムである。

テンボの人の村では、焼畑には、ヒョウタン、カボチャ、トウモロコシ、キャッサバ、インゲンマメ、落花生など、さまざまな作物を混植しているのので、一見畑ではないように見えるかもしれない。基本的には、農作業は男性は男性同士、女性は女性同士で共同作業によって行なわれる。男性は、力仕事を中心となり、食事朝晩の2回だけにすぎない。



テンボの女性による共同播種作業

テンボの女性による共同収穫

ところが女性は、昼頃に必ず間食をする。畑の中のちよつとした果物やバナナを食べ、みんなでおしゃべりしながら、農作業を行なう。

収穫の作業はすべて女性が担当する。参加した人は、必要に応じて収穫物を持ち帰ってよいというルールがあるので、この共同作業は、ある意味で収穫物の再分配の場にもなっている。母親によっては、最低限の子どもの食料などはこれで確保できる。

ここでつくられている主要作物はキャッサバというイモである。世界中の農業生産を見ていると、穀物でも人間の食料は一応足りていることになっているが、それ以外にもイモ類を主食とする人々が多い。経済学者たちは、小麦、トウモロコシ、米などの収穫量だけを考えて発言している。しかしこれは、イモ類は自給用が多く、市場にあまり出でてこないで、経済の統計には入ってこないからである。現実には、主要穀物だけで人々の食料問題を論じることは難しい。より重要なのは、人々がどのように実際に食物を手に入れているかどうか、ということになる。

キャッサバのイモは、乾燥させて粉にして、お湯で溶いてウガリという食べ物にする。これらは貨幣としては売買されないが、人間の生存部分を支える重要な食料である。この村では、キャッサバのウガリとキャッサバの葉や料理用バナナ、インゲンマメなどが主な食べ物だが、特にインゲンマメは貴重なタンパク源になる。落花生は自分たちではそんなに食べず、むしろ商品にして売ることが多い。遠方だが定期的に市が開かれる場所もあり、市場経済はこうした地域にまで浸透してきている。

一族・家族の中心にある 炉と料理

焼畑農業は、森林やブッシュを切り開き、乾燥させて、火を入れる。男性が鍬や掘り棒で耕し、整地をし、さまざまな種類の作物を植える。そこから、女性が除草管理をして作物を育てる。3カ月で収穫できる作物もあれば、6カ月以上かかるものもある。キャッサバは1年で収穫すると小さいので、2年くらいおいて太いキャッサバにする。これらは計画性をもって運営されている。

焼畑では、地力を維持するために、収穫し終わった畑はそのまま放置して休閑地にする。毎年新しい畑を開くので、畑は空間的には毎年移動する。こうした点は日本の農地の感覚とは大きく異なる。時間的にみると、まず森が畑になる。その畑から作物が収穫されて休閑地になる。それが5年もするとブッシュに移る。さらに20年も放置されれば、時には高さ20mを超える森林に回復する。これがうまくいけば、生態系に対してバランスのいい農法と言える。山の斜面にはいろいろな段階の畑がバッチワーク状にあつて、全体として農地となっている。

これを管理しているのは、「ルフ」という親族集団である。日本の大家族(一族)のようなものであり、父系の共通の祖先をもつ人々で、何世代もの人たちが含まれる。それぞれのルフが、テンボ語で「ムワミ」という王から分配された土地を管理している。この王も、ヨーロッパの概念とは大きく異なる。小さな民族が多数あり、それぞれが小規模な王を戴いている。ルフが持っているのは土地の所有権でなく、



一族を意味するルフの小屋

その土地が優先的に使えるという、ある種の占有権にすぎない。ところで、「ルフ」という呼び名はまた、一族の集落の中央にある小屋のことも指している。その小屋の中心には炉があり、そこで人々は共に飲み食いをする。つまり、一族というのは、ある炉を中心に集まる人たちのことで、そこで、一緒にご飯を食べ、一族の話し合いなどがそこで行なわれる。

王の権利は2つある。まず一族の代表者が替わる時に、次の代表者を承認する権利である。もうひとつは、問題を起こした一族をその土地から追放する権利である。つまり、後継者の認定権と追放権をもっている。ただし、王は土地を誰かに分配するだけで、決してその土地を自らの畑とすることはしない。テンポの社会でも、人口の増加により、常に土地の不足と一族の分裂の危機を孕んでいる。土地が分割されると、一族も分裂し、ルフの小屋も分裂して、炉も分れることになる。

一方、それぞれの世帯(グム)の家では、台所用の小屋「ブホシ」をもっている。結婚して最初の1年間は、夫婦は男性の母親のブホシで食事をする。1年経って、男性は自分や妻の友だちに手伝ってもらって、新しくブホシを建てる。木で骨組みをつ

くるのは男の共同作業で行なう。その屋根を葺くのは女性たちである。妻は他所から来る。1年間、嫁ぎ先の女性たちと一緒に働いて関係性を深め、ようやく屋根が葺ける。この新しいブホシの中に台所用の3つの石を置いて炉にする。こうして、その後、夫は妻の元でご飯を食べることになる。ブホシの「ブ」というのは接頭辞であり、これを建てた人がムホシと呼ばれる。「ム」も接頭辞で人を表す。つまりムホシは一人前の男性を意味する。炉を築くことにより、新たな世帯が形成される。世帯という、料理をつくるひとつの塊ができるということになる。

自然のコントロールから 始まった人間社会の飛躍

人類は長い間、自然環境に依存し、そこで手に入るものを何でも食べた。このジェネラライズド・イーターを最も体現しているのが狩猟採集民である。ピグミーの研究である市川光雄先生の研究では、大体300種前後の野生動植物を食べているという。

一方、伊谷純一郎先生によると、人間の社会は先験的不平等性を克服した社会だと言う。動物の世界には先験的不平等がある。足を悪くしてしまった個体、病気になる個体、年老いてしまった個体は、群れの移動について行けなくなる。つまり、自然の力を失った時点で生きていけなくなる。しかし、人間の社会はそうではない。市川先生の狩猟採集民の研究では、例えばゾウが捕れたとして、一番槍の人が最初に肉を取る資格を持つ。狩猟に参加

ブホシと呼ばれる台所用の小屋



小屋の内部の炉

した人が次に肉を得る権利を持つ。しかし、全体としては、狩猟に参加していない人たちも含め、みんなが何らかの肉を得る分配の仕組みができあがっている。さらに、みんなで共食をする。一般には奥さんたちが、それぞれの小屋で料理をつくるが、真ん中の場所にトゥーレという火を焚き、そこで食事をする。男性を中心としているが、開かれた食事の場として機能している。こうした分配の仕組みをつくって不平等性を克服する試みを行なっているのは人間だけである。

農耕社会では、ものをストックしておくという概念ができ、そこから、所有という考え方が出てくる。一方、狩猟採集民は、ものを所有することにこだわらない。

計画を立ててものをつくっていくのが、農耕社会の特色である。準備をして進めていくことこそ、農業への第一歩となる。こうして畑や作物を通じて自然をコントロールしていき、やがて環境そのものをコントロールすることへと展開していく。農業の開始は、農業革命とか新石器革命と言われているものだが、実は非常に長い間にわたり植物や動物と人間との付き合いがあり、それらを次第に人間の管理下においていったということになる。

ヨーロッパでは、家畜と農耕とを結びつける技術が発達していった。家畜の糞を利用して、休耕地に牧草を植え、飼料作物の一部としてカブを入れることで、建物の中で家畜を飼う「舎飼い」ができるようになり、全体としての農業経営を拡大していくことができるようになった。日本やアフリカでは、こうした結びつきはあまり見られない。

私は現在、タンザニアで牧畜をする人たちについ

ての研究も続けているが、農耕と同様、牧畜においても動物という自然をいかにして管理するのが重要となる。牧畜の誕生については、梅棹忠夫先生は2つの技術が必要だとしている。まず、動物を1匹1匹ではなく、群れとして管理する技術を獲得することであり、もうひとつは搾乳技術をつくりあげることである。いかにして母牛と子牛を切り離すか。例えば子牛の口にトゲのついた口かせをつけると、母牛が痛くて子牛を遠ざけるようになる。こうして、本来子牛のための乳を人間が少しずついただく。牧畜民は、家畜をめつたに殺さない。家畜は動く財産であり、増やしていくことができる。これは、農耕と同様、自然をコントロールしていく一形態、人間社会の飛躍の大きな要因のひとつとなった。

都市文明社会の中で 農と食を再考する

私は、日本の農業とはまったく異なるアフリカの農業を研究しながら、農業に共通するある種の普遍性に気づかされてきた。それは、人間の食料を供給し、その生存を保障するものとして農業は存在するのであり、利益をあげることが本来の目的ではないことである。しかし、先進国の農業では、現在そのことがわからなくなっている。

現代の日本では、農村部までが都市文明化していると言える。外部から食料を持ってこなければならぬ都市文明の食料基盤は、基本的には非常に危ういものである。国や地域の農業がその食料をどれだけ支えるべきかを、自分たちの生存の条

件として熟考する必要があるだろう。

現代ではアフリカでも都市化しており、都市の食料は外部から供給されている。その供給をそれぞれの国の国内で行なうのか、世界の市場を通じて行なうのが問題となる。現実には、うまく両者を組み合わせざるを得ない。しかし、例えば石油価格の変動や投機資金が食料の貿易市場に入ってくるだけで、世界の農産物価格は大きく変動する。食料を外国から買うだけのシステムでは、主食用の穀物が買えなくなり、食料不足になることが起こりかねない。

重要なのは、都市文明社会の中で、どうやって自分たちの食料をどのようなバランスで生産し、供給していくかである。それは、農業者だけが考える問題ではなく、都市社会の住民すべてが自分のこととして考えるべきことである。このことは、長期的な視点から見ることが必要であり、社会の基盤や文化の基盤としての食をどう捉えるのか、という視点を失ってはいけない。また、発展途上国の人々の食や農業の問題も、われわれ先進国の側が共に考えていくことが必要な時代に入ってきたと考える。私たちは今、自然環境と人間との問題を再考しながら、実は地球全体としての食料の問題を考えることの必要に迫られている。

末原 達郎（すえはら たつろう）

京都大学大学院農学研究科教授、農学博士（京都大学、1951年京都市生まれ。京都大学農学部卒業。京都大学大学院農学研究科博士課程研究指導認定。富山大学、龍谷大学を経て、2003年より現職。専攻は生物資源経済学、農学原論、日本の農村、コンゴ、タンザニア、カメルーンなど、アフリカ12カ国の農村、フランスの農村でフィールドワークに従事。主な著書に「人間にとって農業とは何か」（世界思想社）、「文化としての農業文明としての食料」（人文書館）。